参考資料 1

「言語と文化への多元的アプローチのための参照枠(FREPA/CARAP)」の能力とリソースの参照枠
日本語翻訳資料（欧州現代語センターウェブサイトより転載）
https://carap.ecml.at/FREPAinstrumentsinotherlanguages/tabid/3194/language/en-GB/Default.aspx

	態度
	第1節　言語/文化と言語/文化/人間の多様性一般に対する注意、気付き、好奇心（興味）、肯定的な受容、寛容さ、尊重、価値づけ（A-1からA-
A-1	
++	注意を向けること
	「異質な」言語／文化／人間に対して
	周囲の言語的／文化的／人間的な多様性に対して
	言語一般に対して
	言語的／文化的／人間的な多様性一般（それ自体）に対して
A-1.1	言語（記号的な表示）／文化／人間一般に対する注意。
A-1.1.1	コミュニケーションの言語的／非言語的な記号に対する注意。
A-1.1.2	言語的／文化的な現象を、観察／内省の対象として見なす／理解する
A-1.1.3	言語一般や個別言語／文化の形式的な側面に対する注意（注意を払うこと）。
A-2	他の言語／文化／人間の存在に対する気づき、あるいは言語的／文化的／人間の多様性に対する気づき。
A-2.1	自分の言語や文化、および他の言語や文化に対する気づき。
A-2.2	言語的／文化的差異に対する気付き。
A-2.2.1	言語や文化によって異なりうる、言語や文化のさまざまな側面に気づい
A-2.2.1.1	言語的な世界（例えば、言語音、文字、統語組織など）や文化的な世界（例えば、テーブルマナーや交通規則など）の多様性に気づいている
A-2.2.2	同一の言語（方言なども含む）や文化の変異形（局所的な変異形、地域的な変異形、社会的な変異形、世代的な変異形）に気づいている
A-2.2.3	言語や文化の中にみられる他者性の痕跡（例えば日本語の中の借用語）に気づいている
A-2.3	言語的／文化的な類似性に対する気付き。
A-2.4	異なる言語／文化の間にある差異および類似性に敏感である
++	
A-2.4.1	あいさつの仕方、コミュニケーションを始める方法、時間の表現方法、食事の仕方、遊び方といったことに、大きな多様性があることに気づいているまた、「それと同時に」、それらの様式が応える普遍的なニーズには類似性があることに気づいている
++	
A-2.5	周囲の、あるいは離れた場所の複言語的／複文化的な状況に対する気付き。
++	
A-2.5.1	社会の言語的／文化的多様性に気づいている
+	
A-2.5.2	教室の言語的／文化的多様性に気づいている

++	
A-2.5.2.1	教室内にみられる諸言語／諸文化の多様性に気づいている（それらの言語／文化が自分の言語的／文化的な実践／知識と併存している場
++	
A-2.6	言語的／文化的な慣習の相対性に対する気付き。
++	
A-3	「異質な」言語／文化／人間、複文化的な状況、周囲の言語的／文化的／人間的多様性、言語的／文化的／人間的多様性一般（それ自体）に対する好奇心や興味。
+++	
A-3.1	多言語／多文化的な状況に対する好奇心。
++	
A-3.2	（自分や他者の）言語や文化がどのように機能しているかを発見することに対する好奇心。
+++	
A-3.2.1	自分の言語／文化と、対象となっている言語／文化の間にある類似性と差異に対して興味を持ち、理解する（したいと望む）こと。
+++	
A-3.3	自分の文化（言語）と他の文化（言語）、あるいは他の文化的（言語的）実践に見られるなじみのある、あるいはなじみのない現象を解釈するにあたって、違った視点を発見することに対する興味。
++	
A-3.4	異文化間でのやりとり、あるいは複言語的なやりとりの際に起こっていることを理解することに対する興味。
+	
A-4	言語的／文化的多様性や他者や異なるものを肯定的に受容すること。
+++	
A-4.1	言語的／文化的に異っているものに対する自分の抵抗感や消極性を制御すること。
++	
A-4.2	他の言語や文化が自分の言語や文化とは違ったふうに機能しうるという事実を受け入れること。
++	
A-4.2.1	他の言語が自分の言語とは異なる音韻論的／意味論的区別や統語構造に基づいて意味を組織化しうるという事実を受け入れること。
++	
A-4.2.2	他の文化が異なる文化的ふるまい（テーブルマナーや儀式など）を用いうるという事実を受け入れること。
++	
A-4.3	他の言語／文化が自分自身の言語／文化とは異なる要素を含みうるという事実を受け入れること。
++	
A-4.3.1	自分の言語のものとは異なる言語音（音素）／韻律およびアクセントの形式の存在を受け入れること。
++	

A-4.3.2	自分の言語のものとは異なる記号と書体の存在を受け入れること（例えば、引用符やアクセント記号やドイツ語の「ß（エスツェット）」など）。
++	
A-4.3.3	自分の文化とは異なる文化的要素（例えば、制度{教育制度や司法制度など）、伝統（食事や祭事など）、人工物（衣服、道具、食品、ゲーム、住宅など）}の存在を受け入れること。
+	
A-4.4	他の現実解釈の仕方や他の価値体系（言語によって間接的に表現されるもの、ふるまいの意味など）の存在を受け入れること。
++	
A-4.5	あらゆる言語や文化の重要性とそれらが占める異なる地位の受容（承
++	
A-4.5.1	教室内のあらゆる言語や文化の価値の受容（承認）、あるいはそれらに配慮すること。
++	教室内のマイノリティ言語／文化の肯定的な受容。
A-4.5.1.1	
A-4.6	バイリンガル／トーク（の機能）に対してはじめから否定的な見解を持たずに対応すること。（バイリンガル／トークとは、特に同一の複言語的レパートリーを持つ話者の間でおこなわれる、二つ以上の言語を用いた話
++	
A-4.7	「混淆した」文化的実践（音楽や料理や宗教などで、別々の文化に由来する要素を統合すること）に対してはじめから否定的な見解を持たずに対応すること。
++	
A-4.8	言語的／文化的差異の広さと複雑さ（したがって、すべてを知ることはできないということ）を受け入れること。
+++	
A-4.8.1	集団や社会の正当な特徴として、個人や集団のアイデンティティが言語的／文化的に複雑であることの受容（承認）。
++	
A-5	世界の言語／人間／文化の多様性や多様であること自体（差異そのもの、異質性）に対する寛容さ。
++	
A-5.1	異質性（他者性）への共感（寛容さ）。
++	
A-5.2	異音を用いる話者（およびその言語）に対する寛容さ。
++	
A-5.3	諸言語／諸文化に対する寛容さ。
++	
A-5.3.1	低く見られている諸言語／諸文化（例えば、マイノリティ言語／文化や移民の言語／文化など）に対する寛容さ。
++	
A-5.3.2	学校で教えられている異質な言語／文化に対する寛容さ。
+	
A-5.3.3	なじみのないもの（言語的なものや文化的なもの）に対する寛容さ。
++	

A-5.3.3.1	理解できそうにないもの、異なっていると思われるものに対して寛容であること(および、そこで生じる自身の抵抗感を制御すること)。
++	
A-6	尊重したり、敬意を払ったりすること。
++	「異質な」、あるいは「異なる」言語／文化／人間に対して
	周囲の言語的／文化的／人間的多様性に対して
	言語的／文化的／人間的多様性そのもの(それら一般)に対して
A-6.1	(複言語／複文化的な状況下での)差異と多様性に対する尊重。
++	
A-6.2	言語的／文化的な接触を重んじる(良さを認める)こと。
+	
A-6.2.1	他の言語や文化からの借用が、ある言語や文化の実体の一部になり、またそれらを豊かにしうるということを認めること。
++	
A-6.3	バイリンガリズムに対して敬意を払う(重んじる)こと。
+	
A-6.4	あらゆる言語が等しく尊厳を持っているということを認めること。
++	
A-6.5	人間の尊厳とすべての人が平等に持つ人権を尊重すること。
+	
A-6.5.1	個々人の言語／文化を尊重する(重んじる)こと。
++	
A-6.5.2	人間的な発達と社会的統合の手段として、および市民権を行使するための必須条件として、個々の言語／文化を認めること。
+	
	第2節　諸言語／諸文化および言語的／文化的多様性に関わる活動に携わろうとするレディネス、意欲、意志、願望(A-7からA-8)
A-7	言語的／文化的な多様性／多元性に関するレディネスや意欲。
++	
A-7.1	複言語／複文化的な社会化に向かおうとするレディネス。
++	
A-7.2	状況に合った儀式や慣習に従いつつ、(言語／非言語に関わらず)多元的なコミュニケーションに携わることへのレディネス。
++	
A-7.2.1	他者の言語でコミュニケーションをしたり、他者からふさわしいと思われるようなやり方でふるまったりしようと試みることへのレディネス。
++	
A-7.3	複言語／複文化的な状況および相互行為と関連した困難に立ち向かうことへのレディネス。
++	
A-7.3.1	他者の言語的／文化的ふるまいや文化的価値観の中に現れる新たなもの、または見慣れないものに(自信を持って)対応する能力。
++	

A-7.3.2	複言語／複文化的な状況や相互行為に内在する不安を受け入れることへのレディネス。
++	
A-7.3.3	自分が予期していたものとは違う言語的／文化的経験を生きることへのレディネス。
+	
A-7.3.4	自分のアイデンティティに対する脅威を経験する（個性の喪失を感じる）ことへのレディネス。
++	
A-7.3.5	部外者であると見なされることへのレディネス。
+	
A-7.4	自分の言語的／文化的知識を他者と共有しようとするレディネス。
+	
A-7.5	異なる諸言語／諸文化の機能（例えば、構造、語彙、表記システムなど）を学習したり比較したりしようとする意欲。
++	
A-7.5.1	ほとんど、あるいは全くなじみのない言語や文化の現象を観察したり分析したりしようとする意欲。
++	
A-8	言語的／文化的な多様性／多元性と関わる形で、あるいは複言語／複文化的な状況の中で参加したり活動したりしようとする願望や決意。
+++	
A-8.1	言語的／文化的な多様性の困難に挑戦する（単なる寛容を超えて、より深い理解や尊重、そして受容に向かう）意思。
++	
A-8.2	意識的に自分の複言語／複文化能力の構築に参加すること。自発的に複言語／複文化的な社会化のプロセスに関与すること。
++	
A-8.3	共通の言語文化（コミュニティが一般的に共有している知識、価値観、言語への態度に基づいて構成されたもの）を築いたり、そこに参加したりしようという意思。
+	
A-8.4	諸言語や言語そのものについての「信頼できる」知識にしっかりと基づきながら、言語文化を構築しようとする決意。
+	
A-8.4.1	諸言語をよりよく理解するために（例えば、それぞれの言語がどこから来たのかということや、それらがどのように変化しているのかということや、何がそれらの類似性や差異をもたらしているのかということなど）、言語文化を自在に使いこなせるようにしようと努力すること。
+	
A-8.4.2	特定の言語現象（例えば、借用語や諸言語の「混淆」など）について自分が持っている表象を言語で表現したり議論したりしようういう決意。
++	
A-8.5	他言語／他文化／他民族について知りたいという願望。
++	

A-8.5.1	自分が知っている人々の個人史やその人々の身近な歴史と関連づけながら、他言語／他文化／他民族と出会いたいという願望。
+	
A-8.6	異なる文化を背景としている人々とのコミュニケーションに参加したり、他者と触れ合おうという意志や願望。
+	
A-8.6.1	受け入れ側の文化や言語を持つ人々とやりとりをしようとする意志（その言語／文化を持つ人々を避けたり、自文化を共有する仲間だけを求めたりしないようにすること）。
+	
A-8.6.2	受け入れ側の文化を持つ人々の、ふるまいや価値観や態度の違いを理解しようとする意志。
+	
A-8.6.3	複言語／複文化的な相互行為の中で、平等な関係を築こうとする意志。
+++	
A-8.6.3.1	他の文化／言語を背景とする人々の助けになろうと努力すること。
++	
A-8.6.3.2	他の文化／言語を背景とする人々からの助けを受け入れること。
+	
A-8.7	自分の決断や行動がもたらす影響や結果を引き受けようとする意志や努力<道徳的次元や責任>。
+	
A-8.8	他者（他者の言語や文化）から学ぼうとする意志。
+	
	第3節　疑問を持つ、距離をとる、脱中心化する、相対化する、態度/姿勢（A-9からA-12）
A-9	言語／文化一般に対する、疑問を持つ/批判的に見る態度/姿勢。
++	
A-9.1	諸言語／諸文化に関して疑問を持とうとする意志。
++	
A-9.2	言語／文化、言語的／文化的多様性、言語的／文化的な「混淆」、諸言語の学習、それらの重要性、それらの有用性といったことを、分析や内省の対象となるテーマとして見なすこと。
++	
A-9.2.1	言語とそのさまざまな単位｛音素、語、文、テクスト｝がどのように機能しているかということを、分析や内省の対象として見なすこと。
++	
A-9.2.2	文化とそれらの諸領域｛制度、儀礼、慣例｝がどのように機能しているかということを、分析や内省の対象として見なすこと。
++	
A-9.2.3	バイリンガリズムや複言語主義や文化的混淆に対する自分の表象や態度を、分析や内省の対象として見なす
++	

A-9.2.4	社会的関係の中での言語の役割{権力、不平等、アイデンティティの帰属}/言語の機能と地位に関する社会政治的側面について、批判的な視点を持っている
+	
A-9.2.4.1	言語を人を操作する道具として用いることに対して、批判的な視点をもつこと。
+	
A-9.3	自分の環境/その他の文化的文脈にみられる文化的な産物や慣習について、そこにある価値観と前提を分析や内省の対象にしようとする意
++	
A-9.3.1	自分のコミュニティや他のコミュニティについて、メディア/常識/自分の対話相手がもたらす情報および意見から批判的に距離を取れること。
++	
A-9.4	自分の価値観(規範)/他者の価値観(規範)に対する批判的な態度。
+	
A-10	「十分な情報に基づいた」知識や表象を構築しようとする意志。
+	
A-10.1	言語的／文化的な現象(例えば、借用や言語的／文化的な混淆など)について、できるだけよく考えた上での/なるべく教条的ではない見解を持とうとする意志。
++	
A-10.2	諸言語／諸文化の領域に関わりのあるあらゆる対象について、複雑性を考慮したり/一般化を避けたりしようとする意志。
+	
A-10.2.1	複言語主義の多様な形式や種類について、一面的ではない見解を持とうとする意志。
++	
A-10.3	文化的差異についての、あるいは文化的差異に関わる慣習的な態度から批判的に距離を取ろうとする意志。
++	
A-10.4	諸言語／諸文化／コミュニケーション一般に関して、障壁を乗り越えたり開かれていようとする意志。
+	
A-11	自分の判断/すでに獲得している表象/自分が持っている偏見を保留しようとするレディネス/意志。
++	
A-11.1	自分の言語や文化から距離を取ろうとするレディネスがあること。自分の言語を外から眺めること。
+++	
A-11.2	自文化や他文化についての判断を保留しようとするレディネス。
++	
A-11.3	他の諸言語／諸文化、およびその話者／構成員に対して自分が持っている偏見と闘おう(解体しよう、あるいは乗り越えよう)とする意志。
++	
A-11.3.1	文化的／言語的差異に対する自分の否定的な反応(例えば、恐れ、軽蔑、嫌悪感、優越感など)に注意すること。

++	
A-11.3.2	多様性の中で獲得し得る、あるいは獲得し得た知識に一致するような、多様性に対する態度を身に付けることへのレディネスがあること。
++	
A-11.3.3	(「言語の純粋さ」という概念に対抗する形で)言語を動的なもの、変化するもの、混淆するものとして見なすこと。
++	
A-11.3.4	周辺化された言語(地域言語や移民学習者の言語や手話など)に対する自分の偏見を捨てることへのレディネスがあること。
++	
A-12	言語的／文化的な脱中心化や相対化のプロセスに取りかかろうとするレディネス。
+++	
A-12.1	自文化の物の見方から距離をとること、およびそれが自分の現象認識に与えうる影響に注意を向けることへのレディネスがあること。
++	
12.2	自分の(言語的な、あるいはその他の)実践やふるまいや価値観などを(一時的にであれ)保留したり問題化したりし、さらに自分の言語的／文化的な「アイデンティティ」を構成してきたものとは違ったふるまいや態度や価値観を(一時的で可逆的なものであれ)身に付けるということを受け
++	
A-12.2.1	「母語」/「母文化」、あるいは学校の言語/文化に対して、自分自身を脱中心化することへのレディネスがあること。
+++	
A-12.2.2	自分自身を他者の立場に立たせることへのレディネスがあること。
+	
A-12.3	いずれの言語や文化についてであれ、諸言語／諸文化を理解するために、母語や母文化との関わりの中で明らかになってきたことを超えていこうとするレディネス(諸言語／諸文化がどのように機能しているのかをよりよく理解すること)。
+++	
A-12.4	諸言語間／諸文化間の差異について、そして自分の言語や文化の持つ相対的な特性について内省しようとするレディネス。
+++	
A-12.4.1	形の上での類似性から距離を取ることへのレディネス。
++	
	第4節　適応することへのレディネス、自信、親近感(A-13からA-15)
A-13	適応しようとする意志やレディネス、あるいは柔軟性。
++	
A-13.1	自分自身と言語的／文化的に異なっている人々と相互行為する際に、自分のふるまいを適応させたり柔軟な姿勢を取ったりしようとする意志。
++	
A-13.2	他の文化に適応するプロセスの中で、さまざまな段階を経験することへのレディネスがあること。
+	

A-13.2.1	他の文化に加わるにあたって生じる不満や感情に対処しようとする(努力する)意志。
+	
A-13.2.2	受け入れ側の文化でのコミュニケーションについて知ったこと、あるいは学習したものに、自分のふるまいを適応させようとする意志。
++	
A-13.3	異質な言語に対する(ふるまいや態度の面での)柔軟性。
++	
A-13.4	異なる認識や表現やふるまいの仕方に対処しようとする意志。
++	
A-13.5	曖昧さを許容すること。
+	
A-14	自信を持つことや力を抜くこと。
+	
A-14.1	状況や話者が複雑であったり多様であったりすることに対処できるという感覚を持つこと。
++	
A-14.2	コミュニケーションをおこなう場面(表現すること/聞き取りや読み取り/やりとり/仲介)において自信を持つこと。
+	
A-14.3	言語に関する自分の能力(言語を学習／使用すること)に自信を持つこ
++	
A-14.3.1	ほとんど、あるいは全く知らない言語を観察したり分析したりする自分の能力についての自信。
+++	
A-15	親近感。
++	
A-15.1	諸言語間／諸文化間の類似性や近接性に関する親近感。
++	
A-15.2	あらゆる言語や文化を接近可能な「対象」として(そのいくつかの側面は既に知っていると)感じること。
+++	
A-15.2.1	言語的／文化的な規則についての新たな特徴や実践(例えば、新たな音声体系、新たな表記法、新たなふるまいなど)に対する(徐々に増していくような)親近感。
++	
	第5節　アイデンティティ(A-16)
Section V. Identity (A-16)	
A-16	自分の(言語的／文化的)アイデンティティを身に付けること。
++	
A-16.1	あらゆる人々が言語や文化に対して持っている関係性の複雑さや多様性に敏感であること。
+	
A-16.1.1	異なる諸言語／諸文化と自分との関係について、それらの歴史や世界の中での実際の状況を考慮しながら捉えることへのレディネス。
++	

A-16.2	自分の話す言語や自分が帰属している文化が（重要な）地位を占めているという社会的アイデンティティを受け入れること。
++	
A-16.2.1	自分自身がある社会的／文化的／言語的コミュニティの（ひいては複数のコミュニティの）一員であると想定すること（見なすこと）。
+	
A-16.2.2	二言語／複言語的、あるいは二文化／複文化的アイデンティティを受け入れること。
++	
A-16.2.3	二言語／複言語的、あるいは二文化／複文化的アイデンティティを価値のあるものとして見なすこと。
++	
A-16.3	他者のアイデンティティを尊重しつつ、自信/誇りを持って自分の歴史的なアイデンティティを捉えること。
++	
A-16.3.1	どの言語や文化に帰属しているかに関わらず（例えば、マイノリティの言語／文化や低く価値づけられている言語／文化）、自分自身を尊重する
++	
A-16.4	異なる、あるいは他者の（支配的な）言語／文化との接触によって生じうる、文化の貧困化や周辺化という危険性に対して注意する（気を配る）こ
+	
A-16.5	他の（支配的な）言語や文化との接触によって生じうる、文化の開放性や豊饒化という可能性に対して注意する（気を配る）こと。
+	
	第6節　学習に対する態度（A-17からA-19）
A-17	経験に対する気付き。
++	
A-17.1	自分の言語的／文化的な能力の程度や価値や利益に敏感であること。
++	
A-17.2	どのような文脈で獲得したものかに関わらず{例えば、学校内/学校外}、言語的な知識や習得に価値を置くこと。
++	
A-17.3	自分の間違いから学ぶことへのレディネスがあること。
+	
A-17.4	言語学習についての自分の能力/自分の言語能力を伸ばしていく能力に自信を持つこと。
+	
A-18	諸言語（学校教育の言語、家族の言語/外国語/地域語など）を学習しようという意欲。
++	
A-18.1	諸言語（およびその話者のこと）を学習することに対する肯定的な態度。
++	
A-18.1.1	学校教育の言語を学習することへの興味（特に異言語を用いる学習者の場合）。
+	

A-18.1.2	母語/学校教育の言語を完璧に使えるようにしたいという願望。
+	
A-18.1.3	他の言語を学習したいという願望。
++	
A-18.1.4	実際に教育が可能である言語以外の言語をいつかは学習することに対する興味。
++	
A-18.1.5	正規の学校教育で教えられることが少ない、あるいはほとんどない言語を学習することに興味がある
++	
A-18.2	より意図的な/よりプログラム化された言語学習に対する興味。
++	
A-18.3	教育過程の中で始めた言語学習を自律的に続けていくレディネスがあること。
+	
A-18.4	生涯にわたって言語学習をおこなうレディネス。
+	
A-19	学習についての適切で十分な情報に基づいた表象を構築しようとする
++	
A-19.1	言語学習についての自分の知識や表象が学習していくにあたって好ましくないと思われる場合（否定的な先入観）、それを修正しようするレディ
+++	
A-19.2	学習の技術や自分の学習スタイルへの興味。
+	
A-19.2.1	未知の言語/コードに出会ったとき、使用した/特定の、理解のための方略について自問すること。

	技能
	第1節　観察や分析をすることができる
S-1	ある程度なじみのある言語や文化について、言語的要素や文化現象を観察したり分析したりすることができる。
+	
S-1.1	観察や分析の手順（いくつかの要素に分けたり、分類したり、要素同士を関連づけたりすること）を活用したり使いこなしたりすることができる。
+	
S-1.1.1	言語や文化の現象を分析する際に、帰納的アプローチを用いることがで
++	
S-1.1.2	言語や文化の現象を分析するために仮説を立てることができる。
++	
S-1.1.3	他の言語や文化を分析する手順に入る際に、既知の言語や文化を用いることができる。
+++	
S-1.1.4	特定の言語や文化の現象を分析するための仮説を立てる目的で、異なる諸言語・諸文化を同時に観察することができる。
+++	
S-1.2	言語音（ほとんど、あるいは全く知らない言語のもの）を観察したり分析したりすることができる。
++	
S-1.2.1	さまざまな言語における産出を注意深く、あるいは適切な方法で聞くことができる。
++	
S-1.2.2	言語音（音素）を切り離すことができる。
++	
S-1.2.3	音節を切り離したり分割したりすることができる。
++	
S-1.2.4	音韻体系を分析することができる（単位ごとに切り離したり、分類したりすることなど）。
++	
S-1.3	表記法（ほとんど、あるいは全く知らない言語のもの）を観察したり分析したりすることができる。
++	
S-1.3.1	書記単位（文や語や最小単位）に切り離すことができる。
++	
S-1.3.2	書記法と言語音との間に一致がある場合には、それらを対応させることができる。
++	
S-1.3.2.1	各単位が切り離され、文字と音声とが対応させられていれば、見慣れない文字で書かれた文章を読み解くことができる。
+++	
S-1.4	統語構造と形態構造（もしくはそのどちらか一方）を観察したり分析したりすることができる。

+	
S-1.4.1	複合語を分割して、それを構成している個々の語を取り出すことができ
+	
S-1.4.2	なじみのない言語の統語構造であっても、それがさまざまな語彙形態とともにくり返し表出されれば、その構造を分析することができる。
++	
S-1.4.3	ほとんど、あるいは全く知らない言語で話された内容について、個々の語を特定し統語構造や形態構造を分析することで、部分的にであれ意味を読み取ることができる。
++	
S-1.5	語用論的な機能（ほとんど、あるいは全く知らなかったり、なじみがなかったりする言語のもの）を分析することができる。
+	
S-1.5.1	語用論的な形式と機能（言語行為）との関連性を分析することができ
+	
S-1.5.2	形式と文脈、あるいは状況との関係を分析することができる。
+	
S-1.5.3	形式とやりとりとの関係を分析することができる。
+	
S-1.6	複言語的なコミュニケーションのレパートリー、あるいは複言語的な状況でのコミュニケーションのレパートリーを分析することができる。
++	
S-1.7	コミュニケーションのさまざまな側面の持つ文化的性質を分析することができる。
++	
S-1.7.1	文化的差異から生じる誤解を分析することができる。
++	
S-1.7.2	ふるまいを解釈する際に用いられているスキーマ（/ステレオタイプ/）を分析することができる。
++	
S-1.8	ある特定のふるまいがどの文化に由来するものかを分析することができ
++	
S-1.9	ある特定の社会現象を、文化的差異によって生じたものとして分析することができる。
++	
S-1.10	ある文化の特徴（例えば、意味や信念や文化的慣習など）が理解できるようになるために、解釈体系を作り上げることができる。
++	
	第2節　特定/識別をすることができる
S-2	ある程度なじみのある言語や文化について、言語的要素や文化現象を特定（識別）することができる。
+	
S-2.1	言語音の形式を特定（識別）することができる（聴覚的な認識技能があ
++	
S-2.1.1	単純な音声的要素（言語音）を特定（識別）することができる。

++	
S-2.1.2	韻律単位を特定（識別）することができる。
++	
S-2.1.3	音声または単語を聞きながら形態素あるいは語を特定（識別）することができる。
++	
S-2.2	書記形式を特定（識別）することができる。
++	
S-2.2.1	基本的な書記形式（例えば、文字、表意文字、句読点など）を特定（識別）することができる。
++	
S-2.2.2	なじみのある言語やなじみのない言語の書き言葉について、形態素や語を特定（識別）することができる。
++	
S-2.3	言語学的な様々な指標から、様々な起源をもつ語を特定（識別）することができる。
+++	
S-2.3.1	借用語/国際的な起源を持つ語/地方の特色を持つ語を特定（識別）することができる。
++	
S-2.4	文法的なカテゴリーや機能や標識（例えば、冠詞、所有格、性、時、複数形など）を特定（識別）することができる。
++	
S-2.5	言語の諸形式を特定し、それに基づいて言語を特定することができる。
++	
S-2.5.1	音韻論的な指標に基づいて、言語を特定することができる。
++	
S-2.5.2	書記法の指標に基づいて、言語を特定することができる。
++	
S-2.5.3	既知の語や表現に基づいて、言語を特定することができる。
++	
S-2.5.4	既知の文法的標識に基づいて、言語を特定することができる。
++	
S-2.6	語用論的な機能を特定することができる。
++	
S-2.7	談話の種類を特定することができる。
++	
S-2.8	文化的な特異性や関連性や類似性を特定（識別）することができる。
++	
S-2.8.1	教室内の他の生徒、あるいは同一集団内の他の構成員が表した文化的諸特徴の中で、特異性や関連性や類似性を特定（識別）することがで
++	
S-2.8.2	自分自身の文化的な特異性や関連性や帰属を特定（識別）することができる。
++	

S-2.9	文化的差異によって生じるコミュニケーション上のバリエーションを特定（識別）することができる。
++	
S-2.9.1	コミュニケーション文化の差異によって生じる誤解の危険要因を特定することができる。
++	
S-2.10	文化的差異と結びついた特定の行動形式を特定（識別）することができ
++	
S-2.11	文化的な偏見を特定（識別）することができる。
++	
	第3節　比較することができる
S-3	異なる言語や文化の言語的・文化的特徴を比較することができる（言語的・文化的な近接性や隔たりに気づいたり、うち立てることができる）。
+++	
S-3.1	比較するための手順をふむことができる。
+++	
S-3.1.1	諸要素についての観察／分析／特定／識別をおこなうことで、異なる言語や文化の類似点と相違点を関連付けることができる。
+++	
S-3.1.2	言語的・文化的な近接性／隔たりについての仮説を立てることができ
+++	
S-3.1.3	言語的・文化的な近接性／隔たりをあきらかにするために、さまざまな基準を用いることができる。
+++	
S-3.2	言語音の間にある近接性と隔たりに気づくことができる（聴覚的に区別することができる）。
+++	
S-3.2.1	単純な音声的諸特徴（言語音）の間にある近接性や隔たりに気づくことができる。
+++	
S-3.2.2	韻律的諸特徴の間にある近接性と隔たりに気づくことができる。
+++	
S-3.2.3	形態素／語のレベルで、複数の言語音の間にある近接性と隔たりに気づくことができる。
+++	
S-3.2.4	聴覚的に言語を比較することができる。
+++	
S-3.3	書記形式の間にある近接性と隔たりに気づくことができる。
+++	
S-3.3.1	書記形式の間にある類似点と相違点に気づくことができる。
+++	
S-3.3.2	形態素／単語のレベルで、書かれた要素間にある近接性と隔たりに気づくことができる。
+++	

S-3.3.3	ふたつ、あるいはいくつかの言語で使われている文字を比較することができる。
+++	
S-3.4	語彙の近接性に気づくことができる。
+++	
S-3.4.1	語彙の直接的な近接性に気づくことができる。
+++	
S-3.4.2	語彙の間接的な近接性に気づくことができる(「間接的」とは、いくつかの言語のうち一言語の中で、同じ語幹を持つ単語間にある近接性を用いるということ)。
+++	
S-3.4.3	借用語の形式を元の言語での形式と比較することができる。
+++	
S-3.5	ふたつ、あるいはいくつかの言語の間にある全体的な類似点に気づくことができる。
+++	
S-3.5.1	言語間の類似点に基づいて、それらの言語に同族性があるかどうかについての仮説を立てることができる。
+++	
S-3.6	異なる言語の中で、言語音と書記の間の関係性を比較することができ
+++	
S-3.7	異なる言語の文法的な機能の仕方を比較することができる。
+++	
S-3.7.1	異なる言語の文の構造を比較することができる。
+++	
S-3.8	異なる言語の文法的な機能を比較することができる。
+++	
S-3.9	コミュニケーション文化を比較することができる。
+++	
S-3.9.1	異なる言語の談話ジャンルを比較することができる。
+++	
S-3.9.1.1	自分の言語の談話ジャンルを、他の言語の談話ジャンルと比較することができる。
+++	
S-3.9.2	多様な言語と文化で用いられているコミュニケーションのレパートリーを比較することができる。
+++	
S-3.9.2.1	自分の言語的レパートリーや言語行動を、他言語の話者のものと比較することができる。
+++	
S-3.9.2.2	自分の非言語コミュニケーションの習慣を他者のものと比較することができる。
+++	
S-3.10	文化的現象を比較することができる(文化的な近接性／隔たりに気づくことができる)。
+++	

S-3.10.1	文化的な近接性／隔たりを特定するために様々な基準を使うことができ
+++	
S-3.10.2	社会生活のさまざまな領域（例えば、生活条件、職業生活、市民活動への参加、環境への配慮など）に関する相違点と類似点に気づくことがで
+++	
S-3.10.3	文化的特徴と対応している意味や含意を比較することができる{例えば、時間の概念を比較すること等}。
+++	
S-3.10.4	異なる文化的慣習を比較することができる。
+++	
S-3.10.5	他の文化の記録／事象を、自分の文化のものと関連付けることができ
+++	
	第4節　言語や文化について話すことができる
S-4	自言語／自文化／他言語／他文化のある側面について、話したり説明したりすることができる。
+	
S-4.1	外国人に対して、自文化の特徴について説明することができる／自分と同一の文化を持つ相手に対して、他の文化の特徴について説明することができる。
++	
S-4.1.1	文化的な偏見について話すことができる。
++	
S-4.2	誤解について説明することができる。
++	
S-4.3	言語に関して自分が持っている知識を説明することができる。
+	
S-4.4	文化的多様性（例えば、良いところや難点、困難など）について議論することができ、そのことについて自分自身の考えを述べることができる。
++	
	第5節　別の言語を理解したり産出したりするために、ある言語についての知識を用いることができる
S-5	ある言語についてすでに使いこなしている知識や技能を、別の言語で理解したり産出したりする活動に用いることができる。
+++	
S-5.1	異なる言語間の類似点や相違点についての仮説、あるいは「仮説の文法」を構築することができる。
+++	
	「転移の基点」＜つまり、言語間やひとつの言語内で知識の転移を可能にするような言語の特徴＞を特定することができる。
S-5.2	
S-5.2.1	目標言語の転移点を、知的に活性化している（つまり、課題に直面したときに即座に諸特徴が思い浮かぶような）言語の転移点と比較すること
++	

S-5.3	既知の言語からなじみのない言語へ、言語間の転移をおこなうことができる。（認識の転移＜既知の言語についてすでに特定している特徴と、なじみのない言語について特定しようとしている特徴の間に関連性を見出すこと＞／産出の転移＜なじみのない言語で産出をおこなうこと＞）
+++	
S-5.3.1	音韻間および書記素間の諸特徴（あるいは規則性と不規則性）に基づいて、形式の転移をおこなうことができる（転移のプロセスを働かせることができる）。
++	
S-5.3.2	（意味的な）内容の転移をおこなうことができる＜複数の意味の一致の中で、中核的な意味を識別することができる＞。
++	
S-5.3.3	なじみのある言語の文法的な規則性に基づいて、なじみのない言語に文法的な規則性を見出すことができる。あるいは、文法レベルで転移をおこなうことができる（機能の転移）。
++	
S-5.3.4	語用論的な転移をおこなうことができる（自言語と他言語のコミュニケーション的慣習の間に関連性を見出すことができる）。
++	
S-5.4	（言語間の転移に先立って、あるいはその後に）言語内の転移をおこなうことができる。
++	
S-5.5	すでにおこなわれた転移の妥当性を確認することができる。
++	
S-5.6	第一言語（L1）での読解ストラテジーを特定し、第二言語（L2）に応用することができる。
+++	
	第6節　やりとりをおこなうことができる
S-6	異なる言語や文化が接触する場面で、やりとりをおこなうことができる。
++	
S-6.1	対話相手のレパートリーを考慮しながら、二言語的あるいは複言語的な集団の中でコミュニケーションをおこなうことができる。
+++	
S-6.1.1	（発話の構造をシンプルにしたり、語彙を変化させたり、よりはっきりと発音しようとしたりすることで）言い直しをすることができる。
++	
S-6.1.2	やりとりの方略について議論することができる。
++	
S-6.2	二言語、あるいは複言語的な集団でコミュニケーションをおこなう際に、援助を求めることができる。
++	
S-6.2.1	対話相手に、一度言ったことを言い直すよう求めることができる。
++	
S-6.2.2	対話相手に、一度言ったことをもっとシンプルな言い方で言い直すよう求めることができる。

++	
S-6.2.3	対話相手に、別の言語に切り替えるよう求めることができる。
++	
S-6.3	社会言語学的あるいは社会文化的な違いを考慮に入れながらコミュニケーションをすることができる。
+++	
S-6.3.1	丁寧表現を適切に用いることができる。
++	
S-6.3.2	敬称を適切に用いることができる。
++	
S-6.3.3	状況に応じて異なる言語使用域（レジスター）を用いることができる。
++	
S-6.3.4	対話相手の文化的背景に応じて、比喩的あるいは慣用的な表現や定型句を用いることができる。
++	
S-6.4	「言語の境界を越えて（言語と言語の間を行き来して）」コミュニケーションをすることができる。
+++	
S-6.4.1	別の言語、あるいは他の諸言語で得た情報をひとつの言語で説明することができる。
++	
S-6.4.1.1	複言語的な文書に基づいて、ひとつの言語で論評や解説をおこなうことができる。
+++	
S-6.5	適切な場面で、二言語または複言語的なコミュニケーションを活用することができる。
+++	
S-6.5.1	言語や言語コードやコミュニケーション様式を変化させたり切り替えたりすることができる。
+++	
S-6.5.2	（状況が許せば）言語使用域（レジスター）や言語変種や言語が機能的に入れ替わるような文章を作ることができる。
+++	
	第7節　学習することができる
S-7	ある程度なじみのある言語と文化の言語的特徴や使用法、あるいは文化的言及やふるまい方を自分のものにする（学ぶ）ことができる。
+	
S-7.1	なじみのない要素を記憶することができる。
+	
S-7.1.1	なじみのない音声的要素（例えば、単純な音声単位、韻律単位、単語など）を記憶することができる。
++	
S-7.1.2	なじみのない書記要素（例えば、アルファベット、表意文字、単語など）を記憶することができる。

++	
S-7.2	ある言語のなじみのない要素を再現することができる。
+	
S-7.2.1	なじみのない音声要素（例えば、単純な音声単位、韻律単位、単語など）を再現することができる。
++	
S-7.2.2	なじみのない書記要素（例えば、アルファベット、表意文字、単語など）を再現することができる。
++	
S-7.3	以前習得した言語と文化についての知識を学習の際に活かすことがで
+++	
S-7.3.1	これまでの異文化間経験を活かして自分の異文化間能力を向上させることができる。
+++	
S-7.3.2	ある言語で習得した知識や技能を別の言語の学習に用いることができ
+++	
S-7.3.3	ある言語の知識や技能を発達させるために、その言語で習得した知識や技能を(言語内での比較、帰納、演繹などをおこなうことによって)用いることができる。
++	
S-7.4	ある言語の要素を自分のものにするために、既に知っている言語との間でおこなった(／うまくいった／うまくいかなかった／)転移を活かすことが
+++	
S-7.5	さまざまな程度に知識のある言語間において、一致と不一致を体系的に自分のものにすることができる。
+++	
S-7.6	自律的に学習をおこなうことができる。
+	
S-7.6.1	言語と文化に関する事柄を学ぶ助けになるようなリソースを活用することができる。
+	
S-7.6.1.1	言語的な参照手段（例えば、二言語辞典、文法書など）を活用することができる。
++	
S-7.6.1.2	学習するために他人を頼ることができる(対話者に間違いを訂正してもらうよう頼むことができる／情報や説明を求めることができる)。
++	
S-7.7	内省的に自分の学習を管理することができる。
++	
S-7.7.1	自分の学習ニーズや学習目標をはっきりと定めることができる。
++	
S-7.7.2	学習方略を意識的に適用することができる。
++	
S-7.7.3	新たな学習機会において、以前の学習経験を活かすことができる（学習を転移を行うことができる）。
++	

S-7.7.3.1	新たな言語を学習する際に、自分の言語／別の言語において技能や知識を用いた経験を活かすことができる。
+++	
S-7.7.4	自分の学習手順を観察したりチェックしたりすることができる。
++	
S-7.7.4.1	自分の学習の進み具合／進展のなさをチェックすることができる。
++	
S-7.7.4.2	自分の学習方法を、それらの成功例や失敗例を考慮に入れながら比較することができる。

	知識
	一節. 記号体系としての言語
K-1	言語の働きについての原則をいくつか知っている。
K-1.1	言語は記号から成り立っており、それは一つの(記号論的)体系を持つことを知っている。
K-1.2	言葉とその指示対象＜その言葉が指す実体＞、または*能記*＜単語、構造、音調…＞と意味との関係は、そもそも恣意的であることを知ってい
K-1.2.1	単語と指示対象に関連がある擬音(声)語の場合でさえ、ある程度の恣意性は残り、言語によって異なることを知っている。
K-1.2.2	異なる言語間で二つの単語が゜同じ形をもつ/似たように見える゜としても、それらが自動的に同じことを意味するとは限らないということを知って
K-1.2.3	文法範疇は、現実を“そのまま”写したものではなく、現実を言語によって体系づけるある一つの方法であるということを知っている。
K-1.2.3.1	文法的性と生物学的性は混同してはいけないことを知っている。
K-1.3	゜単語と指示対象/能記と意味゜の恣意的な関連は、ほとんどの場合明示的ではない形で、言語コミュニティー内の慣習として確立されている／決まっていることを知っている。
K-1.3.1	同じ言語コミュニティー内では、個々人は同じ能記に対しては、おおよそ同じ意味を与えることを知っている。
K-1.4	言語は゜規則/規範゜に従って機能することを知っている。
K-1.4.1	こうした゜規則/規範゜はそれを応用する際の厳格さ/柔軟さにおいて異なることがあり、話者が暗示的な内容を伝えたいと思うときには、意図的に破られることもあるということを知っている。
K-1.4.2	こうした゜規則/規範゜は時間がたち空間的な移動が加われば、さらに発展しうることを知っている。
K-1.5	人々が同一言語だと思っているものの中には、常にいくつもの種類があることを知っている。
K-1.6	話し言葉か書き言葉によって、言語の機能が異なることを知っている。
K-1.7	ある特定の言語(/母語/学校教育の言語/外国語/…)に関する言語的性質の知識を有している。
	二節. 言語と社会
K-2	゜社会が言語の働きにおいて果たす役割／言語が社会の働きにおいて果たす役割゜を知っている。
K-2.1	言語の共時的な変種{地域的、社会的、世代的、職業的、特定の人々に関する変種(国際英語、“フォリナートーク”、母親言葉)}についての知識
K-2.1.1	こうした変種の一つひとつは、ある文脈、ある状況下では正当となりうることを知っている。
K-2.1.2	こうした変種を解釈する為には、それを使用する話者の社会文化的特徴を考慮しなければならないことを知っている。
K-2.1.3	社会的地位(/公用語/地域語/俗語/…)に関するいくつかの言語範疇を知っている。
K-2.2	誰もが少なくとも一つの言語共同体に属していること、また多くの人が二つ以上の言語共同体に属していることを知っている。

++	
K-2.3	アイデンティティは、意思疎通の過程において、“他者”との関わりの中で゜構築され/明確化される゜ことを知っている。
++	
K-2.4	自分が使用する言語は、他の事象と同様に、アイデンティティの構築に寄与することを知っている。
++	
K-2.5	自身の言語に関する゜状況/環境゜について、いくつかの特徴を知ってい
++	
K-2.5.1	自身の環境の社会言語的な多様性について知識がある。
++	
K-2.5.2	自分の環境において様々な言語(/日常言語/学校教育の言語/家庭言語/…)が果たす役割を知っている。
+++	
K-2.5.3	自分自身の言語的アイデンティティは(個人史、家族史、国家史などのために)複雑になりうることを知っている。
++	
K-2.5.3.1	自分自身の言語的アイデンティティを決定している要因を知っている。
++	
K-2.6	ある言語の発展／出現に影響を与えた／与えている歴史的事実(国民／人々の間の関係゜、移動する人々との関係゜に関するもの)について知識
++	
K-2.7	言語についての知識を身につける際には、゜歴史的/地理的゜知識も身につけることになることを知っている。
++	
	三節. 言語・非言語コミュニケーション
K-3	コミュニケーションの機能に関するいくつかの原則を知っている
++	
K-3.1	コミュニケーションには、言語コミュニケーションの他に、他の形態があること[言語コミュニケーションはコミュニケーションがとれる形態の一つに過ぎないこと]を知っている
++	
K-3.1.1	動物が行うコミュニケーションのいくつかの例を知っている
++	
K-3.1.2	人間の非言語コミュニケーション(手話、点字、ジェスチャー…)のいくつかの例を知っている
++	
K-3.2	自分自身のコミュニケーションレパートリー{言語と変種、談話ジャンル、コミュニケーション形態}に関する知識を有している
++	
K-3.3	人は自分自身のコミュニケーションレパートリーを、コミュニケーションが行われている社会的・文化的文脈に適合させなければならないことを
+	
K-3.4(変	コミュニケーションを容易にする言語的手段{簡略化/言い換え等}があることを知っている

++	
K-3.4.1(変	人はコミュニケーションを容易にする為に、言語的類似性{° 系統的つながり、借用、普遍性° }に頼ってみることができると知っている
+++	
K-3.5	コミュニケーション能力は言語的、文化的、社会的性質についての(一般に明示的ではない)知識に依拠していることを知っている
++	
K-3.5.1	コミュニケーションをとるために、人は意のままに使える非明示的・明示的知識をもち、また他者も同じ次元の知識をもつことを知っている
++	
K-3.5.2	自分自身のコミュニケーション能力のよりどころとなる非明示的知識のいくつかの側面を知っている
++	
K-3.6	多言語・多文化能力の観点からすると、異言語を話す人はコミュニケーションにおいてある特定の地位(コミュニケーションにおける特別な地位)を有することを知っている
++	
K-3.6.1	異言語話者で、ある言語についての知識が限定的である場合、その人はコミュニケーションにおいて困難に直面することがありうること、そしてその人はコミュニケーションをより満足の行くものとするために支援を受けるかもしれない/受ける必要があることを知っている
++	
K-3.6.2	異言語話者で、少なくとも別の1つの言語/文化に関する知識を有する人は、他の言語/文化との仲介的役割を果たしうると知っている
+	
	四節. 言語の進化
K-4	言語は絶えず進化していることを知っている
+++	
K-4.1	言語はいわゆる「同族」関係によって互いに結びついていることを知っている/言語には「語族」というものがあることを知っている
+++	
K-4.1.1	いくつかの語族について知っており、その語族に属するいくつかの言語を知っている
+++	
K-4.2	ある言語から別の言語への「借用」現象について知っている
++	
K-4.2.1	言語的「借用」が起こる条件{接触の状況、新たな製品/技術に伴う語彙のニーズ、様式の変化による効果…}について知っている
++	
K-4.2.2	言語的「借用」と言語的「同族」の違いを知っている
++	
K-4.2.3	いくつかの「借用」は非常に多くの言語に広がっている(タクシー、コンピューター、ホテル…)ことを知っている
+++	

K-4.3	言語史(/ある言語の起源/語彙的進化・音韻的進化/...)に関していくらかの知識を有している
++	
	五節. 多元性、多様性、多言語主義、複言語主義
K-5	言語の多様性/多言語主義/複言語主義についていくらか知識がある
+++	
K-5.1	世界には非常に多くの言語があることを知っている
+++	
K-5.2	言語に使われている音には多くの種類{音素、リズム形式...}があることを知っている
+++	
K-5.3	書記法には非常に多様な種類があることを知っている
+++	
K-5.4	多言語/多言語主義の状況は国/地域{言語の数/地位、言語に対する態度...}によって多様であることを知っている
+++	
K-5.5	多言語/複言語主義的状況は、進化するものであることを知っている
+++	
K-5.6	社会言語的状況は複雑になり得ると知っている
+++	
K-5.6.1	国と言語を混同してはいけないと知っている
++	
K-5.6.1.1	非常にしばしば、一つの国で複数の言語が使われる/複数の国で一つの同じ言語が使われていると知っている
++	
K-5.6.1.2	非常にしばしば、言語と国の境界は一致しないということを知っている
++	
K-5.7	自分のおかれた環境や、そこからの距離を問わず、別の場所における多言語/複言語主義的な状況の存在に気づいている
+++	
	六節. 言語間の類似性と差異
K-6	言語/言語的変種には類似点・差異があることを知っている
+++	
K-6.1	それぞれの言語が独自の体系をもっていることを知っている
++	
K-6.1.1	自分自身の言語を構成する体系は、数ある体系のうちの一つの可能性にすぎないということを知っている
+++	
K-6.2	それぞれの言語は現実を認識/組織するための独自の、部分的には特有の方法をもっていることを知っている
+++	
K-6.2.1	それぞれの言語が世界を表現し/「切り取る」特定の方法は、文化による影響を受けていることを知っている

++	
K-6.2.2	それゆえ、ある言語から別の言語への翻訳は、単純なラベル交換のような逐語訳で済むことはまれであって、現実の異なる切り取り方に必然的に含まれることを知っている
++	
K-6.3	ある言語(/母語/学校言語/)の機能を描写する際に用いられる区分は、必ずしも他の言語でも存在する区分ではない{数、性、冠詞...}ことを知っ
+++	
K-6.4	こうした区分が他の言語に見られる時でも、それらは必ずしも同じように組織されているとは限らないと知っている
+++	
K-6.4.1	ある区分を構成する要素の数は言語によって異なり得る{男性と女性/男性・女性・中性...}ということを知っている
++	
K-6.4.2	同じ単語でも言語によって性が異なり得ることを知っている
++	
K-6.5	それぞれの言語は独自の音声/音韻体系をもっていることを知っている
+++	
K-6.5.1	他言語の音声/音声体系は、程度の差こそあれ、自分自身の言語とは異なり得ることを知っている
++	
K-6.5.2	他言語には、訓練されていない耳では認識さえできないが、その言語使用者であれば、他の単語との聞き分けを可能にするような音があることを知っている。
++	
K-6.5.3	言語間には韻律(/リズム/強勢/抑揚/)において、互いに類似性と差異があることを知っている
++	
K-6.6	一つの言語から違う言語を見たとき、一語ごとに対応関係があるわけではないことを知っている
++	
K-6.6.1	言語は、同じことを表現するのに常に同じ数の単語を使うとは限らないことを知っている
++	
K-6.6.2	ある言語における一つの単語が、別の言語では2語以上の単語に対応することがあることを知っている
++	
K-6.6.3	ある言語では現実のある側面を単語で表現するが、また別の言語ではそれを単語で表現しないということがあると知っている
++	
K-6.7	単語が構成される方法は言語によって異なることを知っている
++	
K-6.7.1	言語は区分/関係{一致/複数/所有...}を示すのに異なる方法を使うことがあることを知っている
+++	

K-6.7.2	一つの語を構成する要素の順番は言語によって異なり得ることを知って
++	
K-6.7.3	ある言語で複合語の使用によって表現されることは、他の言語ではいくつかの単語を使用することに相当することがあることを知っている
++	
K-6.8	発話が組織される仕方は言語によって異なり得ることを知っている
++	
K-6.8.1	語順は言語によって異なり得ることを知っている
++	
K-6.8.2	発話要素(/語の集まり/語/)間の関係は言語によって{語順を通して、語尾変化を通して、前置詞/後置詞を通して...}異なって表現され得ることを
+++	
K-6.9	書記体系は様々に機能することがあることを知っている
+++	
K-6.9.1	書記形態{表音文字、表意文字、象形文字}は複数存在することを知って
++	
K-6.9.2	書くときに使用される文字単位の数は、言語によってかなり異なりうることを知っている
++	
K-6.9.3	似た音が、異なる言語では全く違う書記法であらわされることがあることを知っている
++	
K-6.9.4	あるアルファベット体系における書記素と音素の間の対応は、各言語に特有のものであるということを知っている
++	
K-6.10	言語的/非言語的コミュニケーション体系には、言語によって類似点・差異があるということを知っている
++	
K-6.10.1	様々な言語では感情を表現する言語/非言語的方法が異なるということを知っている
++	
K-6.10.1.	いくつかの言語における、感情を表現する方法の違いをいくつか知ってい
++	
K-6.10.2	同じように見えるかもしれない言語行為(/挨拶のしきたり/丁寧さを表す決まり文句/...)が、必ずしも言語によって同じようには機能しないことがあることを知っている
++	
K-6.10.3	話しかけの規則[他者に話しかける様式に関すること]は言語によって異なりうると知っている{誰が先に話すのか、誰が誰に話すのか、tu/vousのように、誰を親称で、誰を敬称で呼ぶか}
++	
	七節. 言語と習得/学習
K-7	人がどのようにある言語を習得/学習するのか知っている
++	

K-7.1	ある言語のスピーキングを学ぶ方法の背後にある基本的な原則のいくつかを知っている
+	
K-7.1.1	言語学習は長く、困難な過程であることを知っている
+	
K-7.1.2	ある言語をまだマスターしていない時に間違いを犯すことは普通のことであることを知っている
+	
K-7.1.3	絶え間ない修正や嘲りをすると、それが学習者を助けることもあるが、同様に学習過程を「妨害」しうると知っている
+	
K-7.1.4	完全にある言語を知っているということは決してない/常に知らないものは存在し、また常に改善の余地はあるということを知っている
+	
K-7.2	言語を学ぶために、人は言語間の(構造的/談話的/語用論的)類似性を足場とすることができることを知っている
+++	
K-7.3	言語的差異に対して肯定的な態度をもっていれば、人はより良く学ぶことができることを知っている
+++	
K-7.4	言語を見る/認識する方法がその言語の学習に影響を与えることを知っ
++	
K-7.5	言語学習には異なる方略があり、それらの関連は学習者の目的によって変わるということを知っている
++	
K-7.5.1	様々な学習方略とそれらの適切さを知っている{聞いてリピートする、何度か書き写す、訳す、一人で発話してみる…}
++	
K-7.6	目的に合わせて使えるよう、自分の使う学習方略をよく知っていることは有用だと知っている
++	
	八節. 文化:一般的特徴
K-8	文化とは何か/文化がどのように機能するかについて知識を有している
+++	
K-8.1	文化はその構成員によって(少なくとも部分的に)共有されている、あらゆる種類の慣習/表象/価値観の総体であることを知っている
+	
K-8.2	多かれ少なかれ異なりのある、多くの文化が存在することを知っている
+	
K-8.3	文化体系は複雑である/様々な領域{社会的やりとり、周囲との関係、現実の知識、言語、テーブルマナー、…}に現れることを知っている
++	
K-8.4	それぞれの文化では、その構成員が社会的慣例/行動に関する特定の規則/規範/価値観を(部分的に)定めていることを知っている
+++	

K-8.4.1	他文化のある領域{挨拶、日常的な必要性、セクシュアリティ、死など}での社会的慣例に関するいくつかの規則/規範/価値を知っている
++	
K-8.4.2	こうした規範のいくつかは禁忌を形成しうることを知っている
+++	
K-8.4.3	こうした規則/規範/価値は、多かれ少なかれ厳格/柔軟になりうることを知っている
++	
K-8.4.4	こうした規則/規範/価値は、時や場と共に進化することもあることを知っ
++	
K-8.5	それぞれの文化に固有のある社会的慣例{儀式、言語、テーブルマナーなど}は恣意的になりうることを知っている
++	
K-8.6	それぞれの文化は、少なくとも部分的に、その構成員の認識/世界の見方/考え方を決める/組織するということを知っている
+++	
K-8.6.1	事実/行動/話されることは、異なる文化の構成員によって、違ったように認識される/理解されることがあることを知っている
+++	
K-8.6.2	世界の知識{数え方、測定方法、時間の測り方など}に関連して、ある文化に固有の解釈スキーマをいくつか知っている
++	
K-8.7	文化は(自己の/他者の)行動/社会的慣例/個人的評価に影響を与えるということを知っている
++	
K-8.7.1	異なる文化のいくつかの社会的慣例/慣習を知っている
++	
K-8.7.1.1	近隣の文化のいくつかの社会的慣例/慣習を知っている
+++	
K-8.7.2	異なる文化のある社会的慣例/慣習と比較した、自分自身の文化の特異性をいくつか知っている
+++	
	九節. 文化的・社会的多様性
K-9	文化的多様性と社会的多様性は密接に関係していることを知っている
++	
K-9.1	文化は常に複雑であり、それ自体(多かれ少なかれ)異なり、°対立する/収斂する°ような下位文化から構成されることを知っている
+++	
K-9.2	ある一つの文化の中にも、社会的／地域的／世代的集団に結びついた文化的な下位集団が存在することを知っている
+++	
K-9.2.1	社会的/地域的/世代的集団による文化的慣例のバリエーションに関する例をいくつか知っている
+++	

K-9.2.2	社会的慣例に関する、ある社会的/地域的/世代的集団に特有の（自分自身の文化や他の文化における）規範をいくつか知っている
+++	
K-9.3	すべての個人が少なくとも一つの文化共同体の一員であり、多くの人が一つ以上の文化共同体の一員であることを知っている
++	
K-9.4	自分自身の状況/文化的境遇に関するいくらかの特徴を知っている
++	
K-9.4.1	（少なくとも部分的には）自分が生きている文化について知っている
+++	
	十節. 文化と異文化関係
K-10	異文化関係と異文化コミュニケーションにおける文化の役割を知っている
++	
K-10.1	それぞれの文化に特有の慣習/規範/価値観は、文化的多様性の文脈内において行動/個人的決断を複雑なものにするということを知っている
+++	
K-10.2	文化とアイデンティティはコミュニケーションのやりとりに影響を与えるということを知っている
+++	
K-10.2.1	行動/言葉とそれらの解釈/評価のあり方は文化的基準と結びついていることを知っている
++	
K-10.2.2	文化がどのように社会的やりとりにおける役割を構築するかについて知っている
+++	
K-10.3	文化的差異が言語的/非言語的なコミュニケーション/相互交流の困難さの根底にありうることを知っている
++	
K-10.3.1	文化的差異によって引き起こされるコミュニケーションの困難さはカルチャーショック/文化的疲弊につながることがあることを知っている
++	
K-10.4	異文化関係と異文化間コミュニケーションは、自分が他の文化に対してもっている知識/表象と、他人が自分自身の文化に対してもっている知識/表象による影響を受けるということを知っている
+++	
K-10.4.1	自分がもつ文化の知識は、しばしばステレオタイプ＜現実の一側面をつかむのに簡略化され、時に役に立つ方法だが、過度の簡略化や一般化に陥る危険がある＞を含むことを知っている
++	
K-10.4.2	異文化関係や異文化間コミュニケーションに影響を与えうるような、文化に起因するステレオタイプをいくつか知っている
+++	
K-10.4.3	文化的偏見の存在に気づいている
++	

K-10.4.3.	(特に自分が学んでいる言語共同体の文化について)文化に起因する偏見/誤解のいくつかの例を知っている
++	
K-10.5	自分たちの固有の行動に対して他人が与える解釈は、自分たちがそれに対して与える解釈とは異なるかもしれないということを知っている
+++	
K-10.5.1	自分自身の文化的慣例は、他人からステレオタイプの形で解釈されることがあることを知っている
+++	
K-10.5.1.	自分自身の文化について他の文化が抱いているステレオタイプをいくつか知っている
++	
K-10.6	自分自身の文化と他者の文化の認識は個人的要因{以前の経験、性格的特徴…}にも拠るということを知っている
++	
K-10.7	(/言語学的/言語的/文化的/)差異に対して自分自身が取るかもしれない反応について知っている[気づいている]
+++	
K-10.8	社会的慣習や異文化間コミュニケーションにかかわる慣例と同様、世界/他の文化の知識や知覚を構造化する文化的基準をもっている
++	
K-10.8.1	学校での学習対象である/クラスの他の学習者が帰属している/身近な環境で目にする文化に関する知識をもっている
+++	
K-10.8.2	学校での学習対象である/クラスの他の学習者が属している/身近な環境で目にする、他文化と比較した自分自身の文化を特徴づけるある特定の要素を知っている
++	
K-10.9	文化間の対立を解決するのに役立てることができる方略を知っている
+++	
K-10.9.1	誤解の原因は共同して探し出し/明確化しなければならないことを知って
++	
	十一節. 文化の進化
K-11	文化は絶えず進化していることを知っている
++	
K-11.1	文化的な慣例/価値観は様々な要因(/歴史/環境/共同体構成員の行動/…)の影響を受けて構成され、そのもとで進化するということを知ってい
++	
K-11.1.1	文化共同体の構成員は、彼らの文化の進化に重要な役割を果たす/果たしうることを知っている
++	
K-11.1.2	ある文化的な慣例/価値観を理解する/説明する機会はしばしば環境によって与えられるということを知っている
+	
K-11.1.2.	文化の進化における制度や政治の役割を知っている

++	
K-11.1.3	しばしば歴史/地理によって、ある文化的な慣例/価値観を理解する/説明する機会が与えられるということを知っている
++	
K-11.1.3.1	ある文化の進化形成に影響を与えた/与える歴史的事実(°国民/人々°の関係、移民…に関する)/地理的事実をいくつか知っている
++	
K-11.2	あるいくつかの文化は、特定の歴史的関係(共通の起源、過去の接触など)によって互いに結びついているということを知っている
++	
K-11.2.1	(歴史、宗教、言語に結びついた)いくつかの主要な文化的領域を知って
+	
K-11.3	文化は絶えず文化間でその要素を交換することを知っている
++	
K-11.3.1	文化は互いに影響しあうことがあることを知っている
+++	
K-11.3.2	自分自身の文化が他の文化から借用した、文化的要素とその歴史をいくつか知っている
++	
K-11.3.3	自分自身の文化が他の文化に与えた要素をいくつか知っている
++	
K-11.4	文化的差異はグローバル化の影響のもとで縮小していることを知ってい
++	
	十二節. 文化の多様性
K-12	文化の多様性に関する様々な現象を知っている
+++	
K-12.1	文化は(依然として)世界の中で大きな多重性を持つことを知っている
++	
K-12.1.1	文化の多様性に関連して、慣例/習慣/慣習の違いには大きな多重性があることを知っている
+	
K-12.1.2	文化の多様性に関連して、価値観/規範には大きな多重性があることを知っている
+	
K-12.2	ある文化を別の文化と区別することはしばしば困難であることを知ってい
++	
K-12.2.1	文化間の境界はしばしば曖昧な/境界のない/移りゆくものであるということを知っている
++	
K-12.2.2	文化を区別する/「数える」ことは困難なことを知っている
+	
K-12.3	文化間にはきわめて多様な接触状況があることを知っている
+++	
K-12.3.1	文化と国/文化と言語を混同してはいけないことを知っている
++	

K-12.4	我々の最も身近な環境で、様々な文化が常に接触していることを知って
+++	
K-12.5	文化の多様性は、ある文化が他よりも優っている/劣っていることを意味するものではないことを知っている
+++	
K-12.5.1	国同士の関係はしばしば不平等である/階層化されていることを知ってい
++	
K-12.5.2	様々な文化間で恣意的におかれた階層性は、歴史と共に変わることを知っている
++	
K-12.5.3	文化間で恣意的におかれた階層性は、物の見方/基準点によって変わることを知っている
+++	
K-12.5.3.	世界の地理的表象は使っている地図によって異なることを知っている
+	
	十三節. 文化間の類似と差異
K-13	(下位)文化間には類似点・差異が存在することを知っている
+++	
K-13.1	それぞれの文化は(部分的に)固有の機能をもっていることを知っている
+++	
K-13.1.1	同じ行動が文化によって異なる意味/価値/機能をもち得ることを知ってい
+++	
K-13.2	文化間には類似点/差異があり得ることを知っている
+++	
K-13.2.1	自分の文化と他の文化の間には、類似点/差異がいくつかあることを知っている
++	
K-13.2.2	異なる文化間の社会的慣例/慣習/価値観/表現手段の類似点/差異点をいくつか知っている
++	
K-13.2.3	異なる社会的/世代的/地域的集団の文化の間には類似点/差異があることを知っている
++	
K-13.2.3.	自分に近い環境での、異なる(社会的/世代的/地域的)集団の文化の間にある類似点/差異をいくつか知っている
++	
K-13.2.4	様々な文化において、感情(/情動/…)に関する゜言語的/非言語的゜な表現の違いをいくつか知っている
++	
K-13.2.5	様々な文化での、社会関係に関する゜言語的/非言語的゜な表現における違いをいくつか知っている
++	
	十四節. 文化、言語、アイデンティティ

K-14	アイデンティティはとりわけ、1つまたは複数の言語的/文化的帰属に関連して形成されるということを知っている
+++	
K-14.1	アイデンティティは様々な水準{社会的、国家的、超国家的・・・}から形成されるということを知っている
+++	
K-14.1.1	欧州の文化間での類似点・差異は欧州のアイデンティティを構成する要素であるということを知っている
+	
K-14.2	人は常に様々な(下位)文化に帰属していることを知っている
++	
K-14.3	人は多重的/複層的/複合的アイデンティティをもつことができることを知っている
+++	
K-14.3.1	そのようなアイデンティティを身につける/生きることは困難かもしれないが、完全に調和のとれたやり方で生きることもできるということを知ってい
++	
K-14.4	° 二つ/複数の文化的、二つ/複数の言語的° アイデンティティが存在することを知っている
++	
K-14.5	他の(支配的な)言語/文化との接触によって、文化は衰弱/疎外する危険性/文化の豊饒化が引き起こされる可能性があることを知っている
++	
K-14.6	自分自身の文化的アイデンティティは(個人史、家族史、国家史・・・のために)複雑になり得ることを知っている
++	
K-14.6.1	自分自身の文化的アイデンティティを決定づける要素をいくつか知ってい
++	
	十五節. 文化と文化的習得/学習
K-15	人がどのように文化を習得/学習するか知っている
+++	
K-15.1	ある文化への帰属/文化変容は長期的な(大部分は非顕在的・無意識下での)学習過程の結果であることを知っている
++	
K-15.2	人はそれを望み、またその文化の価値観を肯定的に受け入れる限り、新たな文化を身につけることができることを知っている
++	
K-15.3	他文化の行動/価値観を身に付ける義務は決してないことを知っている
+++	
K-15.4	まだ十分にある文化について知らない時に、行動/行動の解釈に関する「間違い」を犯すことは普通のことで、このことを理解することで学習への道が開けるということを知っている